

73 日本の日焼け止め事情 (2021年8月5日)

夏になって明るい陽射しが増えるのは嬉しいことですが、気になるのが日焼けです。日本人には、日焼けを気にする人が多くいます。日本に行かれたことがある方は、日傘、帽子、アームカバーやフェイスクバーなどで日光が直接当たらないよう肌を隠して歩く日本人の姿を見て、驚かれたかもしれません。

フランスで初めて生活した二十年以上前に、ヨーロッパでは、日焼けはバカンスに行くことができる人の経済力の象徴として肯定的に捉えられることもあると聞いたときは、とても驚いたことを覚えています。フランスでも多くの日焼け止めを見かけますが、日本人のようにアームカバーやフェイスクバーを身につけているフランス人をあまり見たことがありません。その要因は、日本とフランスの夏の陽射しの強さに違いもありますが、それが全てではないように思われます。なぜ日本人はここまで日焼けに気をつけるのでしょうか？ここではその一例として、日本人女性と肌の歴史的な経緯を調べてみました。

平安時代(794-1185)、日本の美人な女性の代名詞と言えば白い肌で、宮廷で暮らす女性はおしろい(白粉)を塗って顔を白くしていました。白さは純潔を表し、「色の白いは七難を隠す」とも言われて、白い肌が良いとされてきました。当時は照明がなくて暗かったため、肌を白く見せるために白塗りをしました。明治時代(1868-1912)になって欧米諸国との本格的な交流が始まると、外国からの影響で自然な肌の色が好まれるようになり、白塗りは、舞妓や芸妓と歌舞伎役者がする特殊なメイクになりました。



Pots à fard blanc à trois étages
et une enveloppe de fard blanc
白粉段重、白粉刷毛

現代の日本では、日焼けした肌を好む人もいますが、自然な肌に憧れを持つ人もいます。1980年代にオゾン層破壊によって皮膚がんの罹患率が高まるという研究結果が知られるようになると、肌を守るために紫外線を防ぐ効果が高い商品を選ぶ人が増えました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

実は日本における日焼け止めの開発の歴史は古く、日本の大手化粧品会社である資生堂によると、同社は1915年から日焼け止め商品の研究開発を始め、世界でも早いとされる1923年に日焼け止めの販売を始めました。

日焼けに対する考え方は人それぞれですが、日本の各企業では、日焼けを気にする人のために、高温多湿な日本の夏に汗をかいても流れ落ちず、しっかりと紫外線対策をするために、日々新たな化粧品の開発が続けられています。反対に、セルフタニングや綺麗に日焼けするための日焼けクリームも売られています。

このような日焼け止め商品について豊かな経験を有する日本企業の商品の一部は、フランスや欧州向けに更に改良され、皆さんの身近な化粧品店などで見つけることができる商品となっています。



UVIOLIN (1923)
Photo : Shiseido
写真提供：資生堂